

# コンピテンシーに基づいた ICLS 指導者養成ワークショップの設計

Competency based design of ICLS instructor training workshop

宮道 亮輔\*<sup>1</sup>、久保田 真一郎\*<sup>2</sup>、北村 士朗\*<sup>2</sup>、鈴木 克明\*<sup>2</sup>

Ryosuke MIYAMICHI, Shin-Ichiro KUBOTA, Shiro KITAMURA, Katsuaki SUZUKI

熊本大学大学院 社会科学研究科教授 システム学専攻\*<sup>1</sup> 熊本大学 教授システム学研究センター\*<sup>2</sup>

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

<あらまし> 医療シミュレーション学習は経験学習モデルがベースになっている。しかし、医療シミュレーションコースの一つである ICLS コースの指導者養成で、経験学習について適切な支援ができていないと言えない。我々はインストラクター到達目標（コンピテンシー）を作成し、コンピテンシーに基づいた指導者養成ワークショップをデザインした。また、振り返り支援ツールを開発することで、受講者が振り返りを行いやすくする工夫を組み込んで経験学習のサイクルを循環させる ICLS 指導者養成ワークショップを設計した。経過と課題を報告する。

<キーワード> 経験学習、コンピテンシー、シミュレーション、ICLS、生涯学習、教材開発

## 1. はじめに

突然の心停止は、病院内外を問わず誰にでも起こりうる。日本救急医学会は 2002 年から「突然の心停止に対する最初の 10 分間の対応と適切なチーム蘇生」を習得することを目標として、Immediate Cardiac Life Support (以下、ICLS) コースを開催している。ICLS コースは医療従事者のための蘇生トレーニングコースで、シミュレーター（蘇生用マネキン）を使ってシミュレーショントレーニングを行っている。デント・ハーデン (2011) は、シミュレーション学習は、経験学習モデルがベースになっていると示した。ICLS コースの指導者（インストラクター）を養成するための ICLS 指導者養成ワークショップ（以下、WS）が開催されているが、内容や到達目標、受講要件に詳細な規定は示されておらず、WS を開催する WS ディレクターが自由に設計している。そのため、ICLS コースのインストラクターが目指すべき像は明確でない。

また、経験学習モデルをベースとした ICLS コースなどの医療シミュレーション学習において、経験学習のサイクルを循環させるための方略の検討が必要である。インストラクターを養成するためのワークショップ自体も、経験学習を支援する構造になっている必要があるだろう。

## 2. 研究の目的

本研究では、以下の 2 つを開発して ICLS 指導者養成ワークショップを設計し、シミュレーション（ロールプレイ）を行う。

- 1) 医療シミュレーション学習のインストラクターの到達目標（コンピテンシー）
- 2) 振り返り支援ツール

WS 受講者は、コンピテンシーから導かれた理想的なインストラクター像を知ることによって自分の行動との差を知ることができる。振り返り支援ツールを使用してロールプレイの振り返り（内省的観察と抽象的概念化）を繰り返し、さらにコンピテンシーを利用して WS 全体としても振り返りを構築することで、WS を通して受講者が経験学習のサイクルを循環させることを実現する。

## 3. コンピテンシーの作成

鈴木 (2017) が示した *ibstpi*®コンピテンシー標準開発プロセスを参考に、医療シミュレーションコースのインストラクターを育てる内容領域専門家 (Subject Matter Expert, 以下 SME) を対象に、医療シミュレーションコースにおける理想的なインストラクターができる行動についてウェブを用いた質問紙調査を行った。

16 名の SME から回答を得て 15 項目からなるコンピテンシーの原案を作成した。その後、医療シミュレーションコースのインストラクターを対象にヒアリングを行った。92 名がヒアリングに参加し、全体では 95.7% が「賛同できる」と回答した。各要素で聴取した賛同できない理由を元にコンピテンシーを改訂し、さらに SME と協議して医療シミュレーションコースのインストラクター到達目標 (表 1) を作成した。

次に、作成したコンピテンシーが *ibstpi*®インストラクターコンピテンシーに当てはまるかを、有無の 2 段階で照合した。2 名の SME かつインストラクショナルデザイナーが独立して充足度を照合した後に、著者も交えて協議し、有無を決定した。

表 1. 医療シミュレーションコースのインストラクター到達目標

番号	内容
要素 1	コースや臨床現場で必要となる知識やスキルを常にアップデートし、それを説明・実施できる。
要素 2	自分や他のインストラクターの経験を教訓にして次の実践につなげるよう、共に学ぶことができる。
要素 3	コースで用いる教材・資料を熟知し、様々な機器を利用してインストラクションを計画・実施・評価・管理できる。
要素 4	声、視線、距離、環境、時間や倫理面に配慮し、受講者に身体的・心理的に安全な学習環境を提供できる。
要素 5	コースや臨床現場で必要となる資器材を準備し、使用できる。
要素 6	使用するシミュレーターの表現の限界を知り、表現できない内容は自分で表現して受講者に伝えられる。
要素 7	受講者の経験を活かせるような状況設定を考え、講義ではなく実技を通して要点を伝えられる。
要素 8	受講者の行動に合わせてシナリオを進めることができる。
要素 9	受講者の不安や迷い、つまづきを察知し、必要なら図や資料、IT などを使って支援できる。
要素 10	コースや受講者の達成目標を共有し、成果を評価しながら目標に合わせて支援できる。
要素 11	受講者に十分な練習の機会を与え、経験を教訓にして次の実践や応用ができるよう振り返りを支援できる。
要素 12	効果的に質問し、要点が受講者全員に伝わるように振り返りを支援できる。
要素 13	受講者からの質問に、根拠を明示して回答できる。(答えられないときは他の専門家に依頼する)
要素 14	受講者の知識の定着や継続学習を支援できる。

#### 4. 学習目標とチェックリストの作成

作成したコンピテンシーの要素それぞれにパフォーマンス記述を行い、ワークショップで取り上げる必要のある項目を2名のSMEで検討して選択した。さらにそれぞれの項目について学習目標を作成した。作成した学習目標をコースの中で扱う順に並び替え、学習目標の記述とチェック部分、達成したと判断した理由を記載する部分からなるチェックリストを作成した。

#### 5. 経験学習支援ツールの作成と評価

経験学習モデルは具体的経験、内省的観察、抽象的概念化、能動的実験の4つの概念からなる循環モデルで示される。ICLS コースやWSでは具体的経験と能動的実験はシミュレーション(ロールプレイ)で機会が確保される。そのため、残りの2要素、内省的観察、抽象的概念化をどう支援するかが重要であるが、これまでは支援のための方略は示されていないかった。

中原(2012)はいくつかある内省的観察モデルのプロセスの共通点として典型的なものとして、内省プロセスを「描写」「比較」「批判」という3つ程度のプロセスの要素に分解して考える手法と示した。我々は、この3つのプロセスを補助するためのツールを作成した。

そして本研究では、木村ら(2011)が作成した経験学習の実行度を測定するための尺度(16項目、5段階)を使用して、WS受講前後に測定する予定である。また、対照として、従来のワークショップの受講生をおくことを検討している。

#### 6. ワークショップの設計

コンピテンシーを元に作成された学習目標を達成するためのWSを設計した。事前学習用のeラーニングと、対面学習式の研修という構成を採用した。受講者は、eラーニング修了時、対面研修の各内容の振り返り時に「学習目標チェックリスト」を使った自己評価と、その時点での達成できていない学習目標の項目の確認と次の学習の計画作成をおこなう。そして、ワークショップの最後に学習成果がコンピテンシーにどのように対応しているかを考察し、次の学習の計画(アクションプラン)の作成を行う設計とした。

#### 7. 今後の予定

eラーニングや研修のコンテンツを作り込み、インストラクショナルデザインの専門家レビューを受ける。その後、作成したコンテンツを経験の浅いインストラクターに使ってもらう形成的評価を計画している。

#### 参考文献

- デント・ハーデン(2010) 医学教育の理論と実践. 篠原出版新社, 東京
- 木村充(2012) 職場における業務能力の向上に資する経験学習のプロセスとは. 職場学習の探求. 生産性出版, 東京
- 中原淳(2012) 経営学習論—人材育成を科学する. 東京大学出版会, 東京
- 鈴木克明(2017) ibstpi®コンピテンシー標準: その動向と活用法. 医療職の能力開発, 5(1); 1-8